

語られる場の意味 — 障害者殺傷事件を契機にして創られた場を巡って

Meaning of the place to discuss
— From murder case of persons with disabilities

鳥海直美・鈴木千春・尾上浩二・内村恵美
Naomi TORIUMI, Chiharu SUZUKI, Kouji ONOUE and Emi UCHIMURA

1. はじめに

2016年7月26日に起こった相模原障害者殺傷事件（以下「事件」）については、多くの場でさまざまな立場から語られてきたが、語られ過ぎたということはなく、これからもそれが過ぎることはない。

事件のあとで、社会福祉実践者が集う人権研修に講師の立場で関与することが幾度かあった。研修中に事件に触れると、受講者は被告のパーソナリティの特異性について言及することに加え、施設や事業所のリスクマネジメントのあり方や、安全管理体制の強化方法について語った。保育の実践者が参加する人権研修の場では、「施設というところは障害者にとって何もかもが満たされている空間かと思っていた」という感想が聞かれた。自分と何らつながりのないようにして事件が語られている場にながら、わたし自身が置き去りにされるような心持ちがした。もっとも、わたし自身こそが、この事件について語る糸口すらつかめていなかった。

このような状況にあって、一人の個人として事件について語ることを試みる場が設けられた。特定の組織や団体とは離れた一人のわたしとして「どのように語るか」ということそのものが、この場の議題でもあった。意見表明、抗議、解釈、説明、問題提起を意図していない場でもある。「今、声をあげずにどうするのか」という切迫感からも解放されている。語彙を束ねることや声量を大きくする必要もない。わたしの思考をとどまらせることなく、他者と顔を合わせながらことばで語ろうとすることは、事件によって大きく揺らいだ自らの足取りに杖を添えていくような営みであったと思われる。

本稿は、「わたし」に引き寄せて事件を語ろうとすることを意図して設けられた場の記録である。まずは、事件を契機にして語られる場が創られた意図を主宰者が述べる。次に、この場で取り扱った文献の概要や、活動の内容について概観する。さいごに、活動をふりかえって、このような場の意味について思うところを参加者がそれぞれに述べる。

2. 語られる場が創られた意図

2016年7月26日未明、事件があった朝、報道に衝撃を受けた。事件により入所者19人が亡くなり、入所者・職員計26人が重軽傷を負った。殺された障害者を悼む報道は見かけられず、

時間が経つにつれ、被告の情報が溢れてきて、わたしは報道に巻き込まれないために、しばらくテレビをつけることをやめてしまった。

障害者運動の現場でも事件について語られることはあまりなかった。事件後、障害者団体が企画した場に参加して考えることがあっても、それ以外の日常の場では事件のことを話して深めていくことができなかった。そして、被害者を悼む声は大きなうねりとはならなかった。

事件直後、事件について企画された幾つかの集会に参加した時も、被害者その人自身が生きてきたことに目が向けられず、被害者が悼まれていないと感じてしまった。そして、それはなぜなのかを考えていくために、安心して話せる場が必要だと考えるようになった。

そのような場をようやく創ろうと思い、その意に賛同いただいた人たちと、ただただ会って話し、言っぱなしにする時間を2017年4月12日より重ねてきた。組織に所属していると、そこでの役割や責任に応じた答えや、応答の際にスピードが求められるがちである。そのような場から一旦離れ、ただただ会って話すことは、自分自身が事件について考えて向き合うために重要な時間となり、そのようなことを繰り返し体感してきた。(鈴木千春)

3. 活動記録

主宰者が上述のとおり個別に呼びかけて、「ただただ会って話をする場」が2017年4月に発足することになった。開始当時の参加者は、自立生活運動に取り組む障害当事者、ソーシャルワーク教育に従事する大学教員などであった。途中、主宰者とともに自立生活運動にかかわる者が迎えられ、現時点の参加者は6名である。

毎回の活動の前半は、事件に関連する文献を読んで参加者が思うところを自由に話すこととした。後半には参加者の輪番制によって、それぞれの現場で直面している話題を提供しながら意見や感想を述べ合うこととした。

(1) 文献概要

活動のなかで取り扱われた主要な文献は4本である。事件で被害にあった障害者の声や思いに焦点があてられたものを取り扱うこととなった。その概要は表1のとおりである。

【表1】文献概要

文献①	<p>岡原正幸「このいま、想像力の圧倒的な欠如」『現代思想』第44巻第19号、青土社、2016年10月、222-228.</p> <p>【要約】亡くなられた19人の方がどのようにして襲われ、そのときにどのように恐怖を感じていたのかを「想像してみよう」と読者に呼びかけている。併せて、事件が自分の生と無縁であるという認識は、亡くなられた方への敬意を疎むものであるとし、いかにして悼むことができるかと問いかけている。さらに、被告の主張の背後にある優生思想を自分たちの生活圏から完全に排除することの困難性を指摘した上で、被告になり得たかもしれない自分を「自分の中に無理にでも見出すだけの想像力」の必要性が説かれている。</p>
文献②	<p>「天国でも抱っこしたい」毎日新聞、2017年7月22日付朝刊、28面.</p> <p>【要約】娘を奪われた父親への取材を通して、「娘がこんなに可愛かったことを知ってほしい」と、娘と過ごした日常生活を紹介している。朝食時のコーヒーが足りないときに「テーブルを</p>

	カップでコンコンと」たたいて父親に知らせる場面や、就寝時に「布団に潜り込んで」甘える様子などについて語られている。また、施設に娘を預けた自責の念や、施設で最後に会った時に、いつものように抱っこしてあげられなかったことを後悔している思いにも触れられている。がんと診断されたが延命治療を選択しない父親は「早く会って、抱っこしてあげたいなあ」と漏らす。
文献③	「19のいのち－相模原殺傷事件『19のいのちをたどって』」NHK, https://www.nhk.or.jp/d-navi/19inochi/ , 2018年1月 【要約】匿名報道によって亡くなられた19人の方の「豊かな個性」や「決して奪われてはならない大切な日常」を十分に伝えきれていない現状認識に立って、19人の方の生きた証を残すことを目的として、家族、施設職員、元職員、施設関係者などによる思い出が、19人の方それぞれについて綴られている。「家ではアイスクリームが大好きで喜んで食べていました」、「大きな瞳をくるくるさせている表情が、とても心に残っています」などの場面が寄せられている。
文献④	「突撃！障害者殺傷事件」『バリバラ』NHK, 2016年12月11日放送 【要約】事件によって重傷を負いながら一命を取り留めた方と、その家族を取材している。重傷を負った方は事件後に車いすで生活することとなった。ようやく歩けるようになったものの、「お腹が痛い」と家族に訴えることもあり、事件を契機にして食欲が低下している状況がうかがえる。また、刺された傷痕を母親が確認しているときに、「怖い！怖い！」と本人が叫んで、「やまゆり園、やめとく！」と取り乱す様子も映し出される。家族によれば、寝込みを襲われたことから、身体を横たわらせたときに事件を思い出して本人の不安が高まる状況が見受けられるという。心身に大きな傷を負った被害者の声色からも、襲われたことに対する大きな恐怖を十分に汲み取ることができる。

事件後には被告の言動に焦点をあてた報道がなされ、亡くなられた方たちの実名を警察が公表することはなかった。そのようななかで、これらの文献が取り上げられたことの意義として、亡くなられた19人の方を悼む契機をもち得ていることである。

岡原正幸は「思い巡らしてみよう」と呼びかけ、「自分が居合わせなかった現場への真摯な想像が必要」としたうえで、亡くなられたひとりひとりと、いかにしてつながることができるかを問うている。例えば、亡くなられた方がどのような思いで暮らしていたかを理解しようとすることは、彼らとつながることになるだろうか。

事件で娘を喪うこととなった父親は、自宅や施設で娘と過ごした日常の何気ない場面についてエピソードを交えて語っている。「19のいのち」においては、家族やかかわりのあった職員から亡くなられた方との思い出が寄せられている。これらはいずれも、亡くなられた方の人柄や生活の一端を浮き彫りにするものであり、出会うことのなかったその人の生きた時間に思いを馳せることである。これらの文献を手にとることは、亡くなられた一人ひとりの存在を知り、それを記憶に刻む時間であった。

(2) 活動概要

2017年4月12日から2019年1月10日まで、おおよそ2か月毎に1回、2時間程度にわたって、教育機関の施設を利用して事件について語られる場が設けられてきた。12回にわたる活動の概要は表2のとおりである。

【表2】活動概要

回	月日	【前半】文献（再掲）	【後半】話題提供
1	2017年4月12日	場がもたれた意図や短期中期的な方向性について	
2	2017年5月17日	岡原正幸「このいま、想像力の圧倒的な欠如」『現代思想』第44巻第19号、青土社、2016年10月、222-228.	学校現場における個人モデルの弊害
3	2017年7月5日		教員対象「福祉教育基礎研修・人権研修」の構想
4	2017年9月6日		事件直後の障害当事者団体による報道機関への対応
5	2017年11月1日		「語りを聞く／被害に向きあう、ということ」
6	2018年1月10日		
7	2018年3月7日	「天国でも抱っこしたい」毎日新聞、2017年7月22日付朝刊、28面.	社会的養護を必要とする障害児の権利擁護
8	2018年5月8日		多目的トイレに関する議論を巡って
9	2018年7月11日	「19のいのち－相模原殺傷事件『19のいのちをたどって』」NHK、 https://www.nhk.or.jp/d-navi/19inochi/ 、2018年1月	
10	2018年9月20日	「突撃！障害者殺傷事件」『バリバラ』NHK、2016年12月11日放映	活動実践を記録することについて①
11	2018年11月20日	活動実践を記録することについて②	
12	2019年1月8日	活動実践を記録することについて③	

前半に取り扱った事件に関連する文献とは、直接的に関係のない話題が後半に提供されたが、人間の権利を考えるという点において、文献の内容が後半の意見交換に少なからず影響をもたらしたと思われる。

4. 活動をふりかえって—語られる場の意味

(1) 存在の傍らでつぶやくことのできる場

定期試験の始まる日の朝に事件は起こった。その日の試験では、村上龍による小説『希望の国のエクソダス』に登場する「UBASTE プロジェクト」の声明文を取り上げていた。「日本には何でもある。だが希望だけがない」と主張する中学生がネットビジネスを起こして日本経済の危機を救うために独立国を造るという小説である。その過程で現代の姥捨て山を創って、役に立つ老人を除いたすべての老人を施設に隔離することが呼びかけられる。試験では、インターネットでこの声明文を掲げた中学生に対して手紙を書くことを自由記述回答にて求めたところ、「UBASTE プロジェクト」の中止を呼びかける意見が多くみられた。

しかし、その日の朝にわたしが暮らす社会のなかにある障害者施設で事件が起こった。障害者を施設に隔離することとは別様の地域社会のあり方を模索し続けていたわたしは大きな無力感に覆われながら、この事件にどのようにして向き合えばよいのかその糸口すらわからないでいた。その夏が終わろうとする頃、「事件から考える場を創りたい」という思いを鈴木さんから聴いた。次の春を待って語られる場が設けられた。

初回のものである。「今どう思うか」と問われた。かつて、障害者施設における実習

で、障害者の行動が制限されている状況に直面した学生から、「実習を続けるかどうか悩んでいる」という思いを打ち明けられた場面が思い起こされた。施設という空間への違和感を抱き続けながらも、学生に対して施設実習に取り組む機会を提供している自身の矛盾を突き付けられた。極めて少ない職員体制のもとで集団生活が強いられ、個人の自己決定に大きな制約がもたらされるという点において、施設は根本的に変わりようがないのではないか。そのような施設という場を置き去りにしていた。施設で暮らす人と積極的に知り合うことをしなかった。どのような思いで暮らしているのかを聴いてこなかった。そのような自責の念も含めて、うしろめたい思いを吐露できる場であった。「ただただ」聴くために存在してくれる人が傍らにいて語ることでできた思いである。

この場で取り上げられた文献を通して、亡くなられた方が、その仕草やふるまいでもって思いを豊かに表現し、その思いが家族や身近な人に汲みとられ、応答的かつ固着的な関係のなかに生きてきたエピソードに触れた。一方、事件直後に被告は警察に「意思疎通できない障害者」と語ったとされる。意思疎通というのは相互関係のなかで為される営みであって、すべての人に意思があるにもかかわらず、「意思疎通ができない」と言い切ってしまうのは、共に生きる関係の形成を放棄することである。意思を言語で表現することに制約のある人と応答的な関係をとり結ぶ経験を積み重ねながら、共に生きる関係を模索することは、「意思疎通ができない」という障害者への偏見に抗うことである。言語とは別様の仕方で意思を表現する人と出会って、互いの思いを伝え合う機会が生活のなかに挟み込まれているだろうか。施設で暮らしている人も含めて、そのような人の思いを聴いているだろうか。そうして聴かれた思いこそを共に生きる地域に向かって歩みを進める起点にしたいとも思う。これらの独り言のような自問を、声に出してつぶやいてみることでできる場でもあった。(鳥海直美)

(2)「自立生活」も普通の選択肢としてあるように

事件があった朝、テレビをつけて報道を観たとき、すぐに理解ができず、数分のあいだ、テレビをジッと観ていた。ようやく理解ができた瞬間、わたしが障害児施設に入っていたときのことや、一緒に入所していた人たちが頭の中に出てきた。それと同時に大きな怖さを感じた。

わたしは子ども時代に施設でみんなと過ごす中で、軽度や重度などの障害の程度は関係なく、それぞれが一人の「人」であることを自然と感じて育ったので、障害を理由に殺されることは信じられなかった。体が熱くなるぐらいに腹が立った。

この会へのお誘いを受けたとき、この事件を思い出すことやあのときに感じた思いが薄れている自分がいたことに気づいた。また、亡くなられた19人の方を想いながら話し合い、本人の思いを追及していくことで、現在担当している2人の知的障害の方の自立支援に関して、一層寄り添えるサポートのヒントを見つけることができるのではないかと思った。

わたしが参加した日は、亡くした娘への想いを語った父親の新聞記事を読んで、それぞれが思ったことや考えたことを話し合った。わたしはこの時間にすごく考えた。父娘ともに大切に想い合っている関係であるのに、どうして一緒に住み続けられなかったのだろうか。どのようなサポートがあれば一緒に住み続けられたのか。施設以外の住まいの選択肢はなかったのだら

うか。家族とは何だろうか、などと多くを考えた時間になった。

現在担当している2人の知的障害のある方の自立支援を進めていくなかで、本人の自立生活が実現すれば、選択肢が増える人が他にも多くいる。家族と生活できなくなったとき、本人・家族・支援者のみならず、「自立生活」も普通の選択肢としてあるようにするためにも、2人の自立生活を実現し、サポートを続けていこうと強く思った。(内村恵美)

(3) 実際に会ってお互いの顔や息遣いを感じられる場

バリアフリー運動などで旧知の関係だった鈴木さんから呼びかけを頂き、この会に途中から参加した。2017年の夏のことだった。

事件から一年余り経っていたが、わたしたち障害者が感じた衝撃・傷跡は深く残されたままだった。一方、マスコミで取り上げられることもほとんどなくなるなど世間での「風化」は驚くほど速く、その「落差」に事件がもたらした亀裂の深さを感じていた。また、この事件を「容疑者の特異性」に矮小化し精神障害者への偏見を煽るように「精神保健福祉法改正案」がつくられた。反対運動を繰り広げ何とか食い止めてはいたが、国会への再上程が見込まれる緊迫した時期だった。

そうした時だったからこそ、この会に参加したのだと思う。

わたしは元来SNSの熱心なユーザーでもなく情報収集に使うくらいだったが、ますます遠ざかっていった。それも事件と無関係ではなかった。SNS上のタイムラインに流れてくる、知人同士のこの事件を巡る激しいメッセージの応酬に戸惑った。長年の運動経験の中で様々な論争は当然あったし、異なる意見が闘わされること自体を怖れるような気質でもない。だが、SNSでの激しい「言葉」の応酬は、そうした運動方針を巡っての論争とは異なる「後味」の悪さがつきまとった。おそらく、この事件が持つ独特の「毒」が、SNSという仮想空間の中でより「凝縮」されるのだと思う。そうした「毒」と闘うためには、実際に会ってお互いの顔や息遣いを感じられる中で話し合う場が不可欠だ。

また、わたしは障害者運動上の役割から、事件後、団体声明の準備や政府への要望、そして、押し寄せるマスコミからの問い合わせの対応を担うことになった。いずれも色々な動きを追いかけながら期限までに対応せねばならず、ある意味、「時間との闘い」の連続だった。

それとは対称的に、この会ではふだんの時間の流れの何倍もかけて「自分はどう感じたか」といったことを探っていく。逆説的だが、即座の「アウトプット」と結びつかないこと、すなわち「ただただ」ということにこそ意義があることを押さえておきたい。(尾上浩二)

(4) ただただ会って話をする場

ふり返ること、立ち止まってみることや、何かの意味について語り合うこと、様々な意見を重ねながら言葉の背景を考えることは、とても必要なことだと思っている。しかし、日常の中ではスピードを求められ、役割や責任に応じた答えを求められる場面が増えていく。

だからこそ、ただただ会って、思ったことや感じたことをただただ話すことで、自分自身をクリアにし、自分自身を深めていくためのこの時間と場にはとても大きな意味があり、わたし

にとって必要な時間となっている。

そして、わたしたちはまだ、事件で亡くなられた「人」のことを語り切れてはいない。それは語り切れないのかもしれないし、そもそも語り切っているのかということも含めて、ただただ亡くなられた方々のことに心を寄せて、これからも、ただただ会って話を続けていきたいと思う。このような場が色々なところで展開されることを願う。(鈴木千春)

5. さいごに

事件を起点にして「ただただ会って話をする」という場が設けられたことの意味を考えると、岡原正幸(2016)による既出文献に述べられている文章が呼応する。

とにかく自分の不安やまとまらない散り散りの思いや感情を口にする場所が必要だと思う。できれば他者に身体と身体が向き合う場所がほしい。……(中略)……それらの意見や主張や言葉、そこからこぼれ落ちる、それぞれの人の思いや言葉が少なくとも漏れ出るような場所も必要だ。……(中略)……忘れない手立ても必要だ。いたるところで散見される、想像力の圧倒的な欠如。それに抗することには、忘れない、ただそれだけでも大事だ。

記録することを意図することなく、「ただただ会って話す」ために設けられた場でありながら、その経緯を記録することについては議論が重ねられたことを最後に付しておく。この記録は、亡くなられた19人の方をわたしなりに悼んだ時間を記憶に留め、これらも機会のあるごとに思い返していきたいという思いの表れでもある。そして、事件が忘れられないために、このような場がさまざまところで試みられるために、本稿で紹介した文献をその手がかりのひとつとして用いられたい。

参考文献

- ・岡原正幸「このいま、想像力の圧倒的な欠如」『現代思想』第44巻第19号、青土社、2016年10月、222-228.
- ・「天国でも抱っこしたい」毎日新聞、2017年7月22日付朝刊、28面.
- ・「19のいのち－相模原殺傷事件『19のいのちをたどって』」NHK、<https://www.nhk.or.jp/d-navi/19inochi/>、2018年1月.
- ・「突撃！障害者殺傷事件」『バリバラ』NHK、2016年12月11日放映
- ・村上龍『希望の国のエクソダス』文藝春秋、2000年.

